

駿河湾の特産サクラエビ

●サクラエビの生態せいざい

サクラエビは分類学上、甲殻類こうかくるいクルマエビ属、サクラエビ科に属します。親エビの体長は四センチメートル〜五センチメートル。一年生の動物プランクトンで、生きている時は透明に近く、全身に百五十余りの発光器を持っています。真っ赤なハート型の心臓部、足の付け根にあるピンクの斑点はんてんが特徴で、死後に美しい紅色になるところからサクラエビと名づけられました。たくさんさんの足を小刻こまごまみに動かして海中を移動する姿はとても愛らしいものです。

日中や月夜には海中二百〜三百メートルの深さの所において、日没から夜中にかけて二川河口にかけてが最も中心的な産卵場となっています。

卵は直径が〇・二五ミリメートル程度の小さな球型で、淡いブルー色をしています。一匹ひとすずの雌メスから、およそ千七百〜二千三百粒の卵が、水深二十〜五十メートルの付近にばらばらに産み出されます。一日半ほどでふ化し、浮遊ふゆうしながら変態を重ねて、約一カ月で稚エビに、十〜十二カ月で親エビへと成長していきます。

産卵を終えた親エビは、まもなく寿命が終わり、十一月ごろにはすべてその年に産まれたサクラエビ（新エビ）となります。

サクラエビ漁

●漁業のおこり

庵原郡由比町や蒲原町では、明治時代の

十〜三十メートルの所まで浮上してきます。夜明けごろには再び毎分一・八メートルくらいの速さで下降。真冬の厳寒期げんかんきには、夜間でも浮上することは比較的少ないといわれています。

このように、本来、深海動物しんかいどうぶつとして知られているサクラエビですが、駿河湾では、富士川、安倍川、大井川の淡水たんすいが混じる河口付近で密集して取れます。サクラエビの生息は、遠州灘えんしゅうなだや相模湾さがみわん、東京湾などでも認められています。駿河湾のように沿岸に接近して多く繁殖はんしよくしているケースは、世界でもあまり例のないことだといわれています。

●サクラエビの一生

サクラエビの産卵期は毎年六月から九月ごろまで。駿河湾奥部の由比ゆい、蒲原沖かんげらおきと湾西部の焼津沖、特に由比、蒲原沖から富士

中ごろまで、キス縄やサメ縄の底釣り漁※を主体に沿岸漁業が営まれてきました。このころ既に、春から夏にかけてサクラエビが取れていたそうです。しかし量が少なく、生で天日干してんぴほにするほかは加工方法もわからず、漁業として成り立つまでにはいきませんでした。

明治二十七年、由比町に住んでいた望月平七氏と渡辺忠兵衛氏の共同の漁船が富士川沖で漁をしていた時のこと。網に付いた浮き樽たるが外はずれてしまい、網は海中深く沈んでしまいました。そのため深海魚のサクラエビが偶然にも大量に取れ、これがサクラ

※底釣り漁：一本の縄に6メートル間隔に針とえさを付けて、キス縄は水深五百メートル、サメ縄は水深七百〜八百メートルくらいまで下げて魚を釣る漁法